二〇二三―十月　なにはづ短歌会【第百四十二回】　会記　森田幸子

十月七日（土）　えらぎの家にて浅田弘子先生のご指導の下開催。
参加者　二十四名、詠草二十八首　出席者十名

夏の間に公園の草いたく伸びわが足裏に強く弾みぬ・・・・・・・　加賀見明男

夏の朝さまざま届く野の花は生駒の麓の友の摘み来ぬ・・・・・・・神門明子

エスペラント学ぶ意欲の沸き出でて歓迎会は賑やかに終ふ・・・・・・高枝悦美

撮影のドローンの動きに初めてと七十四の兄小声にて言ふ・・・・・・島村直子

稲穂垂れ鳥よけの網張りてゐる田の畦歩む癒えたる夫と・・・・・・森田幸子

モンゴルの人らを道頓堀に案内すおぼつかぬエス語話しつつきて・・中野真由美

ＥＰＡの歌祭歌集にロシア人の反戦詠みし献詠歌あり・・・・・・増井さえ子

残暑続き秋物仕舞ひ夏服の赤札出せば客の来たりぬ・・・・・・・　松本和子

後遺症の頭痛と手の麻痺詠みし夫の意外に明るき歌書き写す・・・　浅田弘子

なつかしき谷中銀座を歩みつつ健やかなる日の叔母を思ひぬ・・・　久井照子

早朝に名月いづこか眺むれば工場の上に光り輝く・・・・・・・　宇佐美賢治

忘れずに吾にらっきょうを漬け呉るる友に似合ひの帽子を選ぶ・・奈良典子

高熊山に共に参りし日の笑顔思ひつつをり君のみ葬り・・・・・　宇佐美日出子

スイス人のエスペランチスト自らの点てしお薄を飲みて微笑む・・田中文子

以上